

日本学研究はだれのものか

森山 新

1. グローバル化と日本学研究

「国際化 (internationalization)」は国境を越え、人的交流が盛んになった時代の言葉である。今日は「国際化」を越え、「グローバル化 (globalization)」時代を迎えている。もはや異なる言語・異なる文化を持つ様々な人々が日常的に生活する「共生空間」が至る所に造成されている。このような時代の中で、本来「地域研究 (area studies)」としての「日本学 (Japanese studies)」はどうあるべきかを考えるのが、今回のテーマの目指すところである。「地域研究」とは「その地域の特色を他の地域と比較しながら考察し、当該地域の文化、言語、社会、民俗などについて広く研究する学問分野」である。であるとすれば、日本学が日本 (だけ) のものとしてとどまる限り、日本学の深化は見込めない。内外、東西などの多角的な視点とその交差が必要であり、そのためには世界で展開される地域研究との研究交流が必要である。

次に本学がめざし求めてきた「国際日本学」とは何かについて述べてみたい。「国際日本学」とは、海外において展開される日本学研究との比較と交流により、日本学研究の深化をめざす学問分野である。それは海外の日本学研究が必然的にその地域との比較的な視点を含んでいるからである。つまり海外の日本学研究は、とかく日本における日本学研究が欠如しがちな客観的、多角的視点を補い、日本における日本学研究に深化をもたらしてくれるものである。それゆえ、比較日本学研究センター (現在の「比較日本学教育研究センター」) 概要には、「本センターは、日本学研究の国際的な交流とネットワークの形成を目的として平成16年4月に発足しました。世界各地で行なわれている日本学研究を結びつけて、交流を促進しつつ国際共同研究を推進します。国際日本学シンポジウムを開催するとともに、共同研究プロジェクトを作り国際的・学際的情報ネットワークの構築を進めます。」(『比較日本学研究センター研究年報』創刊号、151p) と明記されている。

2. 日本語研究の国際化

かつて1970年代、日本の高度経済成長の中、世界で日本語を学習する人口が増加した。それまでは日本語といえば日本人が使用する言語と言ってもそれほど大きな間違いではなかったが、そうではなくなり始めた時代である。「国語」という用語が意味を失い始める時でもあった。ここに日本語 (学) 研究は新たな時代を歩み始める。日本語を母語とせず、別の言語を母語とする学習者が第二言語として日本語

を学ぶ中で、様々な誤用、中間言語 (interlanguage) を産出する。その中で、世界の他の言語との「対照 (contrastive) 研究/分析」が活発化し、世界の諸言語の中での日本語の類型論的 (typological) な特徴が考察された。言語学のさまざまな知見も取り込まれていく。その結果、日本語とはどのような言語であるかが客観的視点から語られ始めたわけである。さらに日本語教育学の分野では20世紀末から日本語教育国際シンポジウムが毎年のように開催され、そこで日本は単に発信する側ではなく、むしろ世界に展開される日本語教育学の教育・研究成果を学ぶ機会ともなっている。

3. 日本学の国際化

このようなことは何も言語学 (日本語学) や言語教育学 (日本語教育学) の分野だけに限られたことではないであろう。また日本学とは地域研究であるとともに学際的 (interdisciplinary) な領域でもある。この国際日本学コンソーシアムでも言語学、言語教育学、文学、思想、歴史学と5つの部会が存在している。そのそれぞれが他の文化のそれと対照し、その異同を考察する中で、はじめてその特徴や性格が客観的視点から見えてくるはずである。

4. お茶の水女子大学の国際日本学研究

お茶の水女子大学は1999年度、大学院に「国際日本学専攻」を設置し、日本学を国際的視野から眺めてきた。あれから10年、その間、11回にわたり「国際日本学シンポジウム」が開催され、2004年度に「比較日本学研究センター」が設立され、2005～2006年度「魅力ある大学院イニシアティブ」、2007～2009年度「大学院改革支援プログラム」が連続して採択され、世界各地で国際ジョイントゼミ・シンポジウムが開催されてきた。こうした基盤の上にこの「国際日本学コンソーシアム」は2006年に始まった。そのめざすところは言うまでもなく、国際的な視点から日本学研究を行う研究者の育成である。

5. 日本学研究のグローバル化と国際日本学コンソーシアム

この国際日本学コンソーシアムは今回第4回を数える。今回は全体テーマとして「日本学はだれのものか」を問うている。このことは、日本学もまた、「国際化」を越え、「グローバル化」を目指す段階にきているということを意味する。それは日本学の中心に日本が居続けることの重要性が薄れ、それに代りさまざまな視点から日本について研究がなされ、その

成果をお互いに学びあう中で、今まではたすことができなかつた日本学研究の深化が期待できることを意味している。

今回のコンソーシアムでも日本学研究で世界をリードする8つの大学、ロンドン大学 (SOAS)、カレル大学、台湾大学、淑明女子大学、同徳女子大学、北京日本学研究中心、パーデュ大学、パリ・ディドロ (第7) 大学が本学に集い、グローバルな視点から日本学研究を行うための研究者教育が行われる。

6. 日本学研究のサイバー・コンソーシアム

さらに、今回はTV会議システム (video conference system) を通じてドイツ・ボン大学の参加が実現した。TV会議での参加は昨年ヴァッサー大学に続き2回目であるが、これらの成功を基盤として、こうした日本学研究・教育のグローバルなコンソーシアムが日常化することを目指している。日本学研究のグローバル化とその日常化のために、サイバー・コンソーシアムの設立は不可欠である。なぜならインターネットに代表されるサイバー空間は、現実の空間より一歩先に、日常的なグローバル化を実現しているからである。実際に現在、本学は世界の7か国 (ドイツ、ポーランド、チェコ、タイ、韓国、アメリカ、日本) の7大学で「多言語・多文化サイバー・コンソーシアム (MMCC)」を構築し、TV会議などを用いながら、学部において日本語・日本文化教育を含む多言語・多文化教育を開始している。また同

徳女子大学との間で2004年より毎年行われている「日韓大学生国際交流セミナー」では、今年度よりインターネットを介して事前の遠隔交流・討論を実施している。今回のボン大学の参加により、学部のみならず、大学院でもサイバー・コンソーシアムが定着し発展する契機となることを祈りたい。それでこそコンソーシアムは真のコンソーシアムとなり、グローバルな視点からの日本学研究と教育の基盤となりうると考えている。

参考文献

- 森山新 (2008) 「文化を取り入れた総合的日本語教育のための新たなとりくみ—国際交流型授業と国際遠隔協働授業—」『大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」平成20年度活動報告書学内教育事業編』(お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科) 269-270
- 森山新 (2009a) 「研究領域への扉 第六回 認知言語学 (後篇)」『月刊日本語』(アルク) 2009年9月号、66-69
- 森山新 (2009b) 「認知言語学と第二言語としての日本語の教授法」『認知言語学の拓く日本語・日本語教育の研究と展望』(北京大学)、33-36

参考サイト

- 多言語・多文化サイバー・コンソーシアム
<http://globalnetwork2009.blogspot.com/>



写真1

ヴァッサー大学と本学とのTV会議授業 (2008年)



写真2

「多言語・多文化サイバー・コンソーシアム (MMCC)」のサイト <http://globalnetwork2009.blogspot.com/>

もりやま しん／お茶の水女子大学 比較日本学教育研究センター長